システム化と相互性の教育人間学的理解

矢 野 智 司

1．ホスピタリズムと児童虐待という問題

本論は、田中毎実氏（本学高等教育教授システム開発センター教授）の論文「ホスピタリズムと教育における近代――人間形成論的再検討」ならびに田中氏と鷹尾雅裕氏（愛媛県中央児童相談所相談員）との共著論文「制度化と相互性――ホスピタリズムとその一事例に関する人間形成論的研究」そして「虐待と家族」についての教育人間学からのコメントである[(1)]。

養護施設から精神薄弱児施設へと、さらに養護施設を経て精薄者授産施設へと、ホスピタリズムの行動様式を示しさまざまな施設を漂流するＭと、家族関係を愛情ではなく暴力という手段によってしか構築できない両親から、筆舌につくしがたい虐待をうけたＡ男とＢ男、私たちはこの三人の子どもの前に立たされている。教育人間学を学ぶものとして、これらの論文にたいして何を語ることができるのかについて考えてみたい。また田中氏がこれらの事例を解釈するときに使用している「システム化（制度化）」と「相互性」という理論図式の射程を論じてみたい。

2．「漂流」と「定着」の事例研究がもたらすもの

田中論文ならびに田中・鷹尾共著論文では、ホスピタリズムと児童虐待の二つの事例が取りあげられている。ホスピタリズムの事例は「漂流するもの」の視座から、児童虐待の事例は「定着するもの」の視座から、今日の教育状況を可視化すると述べられている。Ｍはホスピタリズムの行動様式によって問題を引き起こし、そのためにさまざまなシステムを漂流することになるが、施設の職員たちは一方で硬直したシステムの一部としてＭを否定しもするが、もう一方で個人的なぎりぎりの努力によってシステム化を乗り超えて、Ｍと新たな人間的関係を再構築しようともする。「漂流」という視点で描こうとするのは、施設を漂

流する子どもを事例に、システムの生みだす病理に由来するシステムと相互性との再編成のことである。それにたいして、A男もB男も、家庭において両親から虐待を受けるが、そのような虐待は家族関係をなんとか生成させようとする両親の強迫的ともいえる投企の一部でもある。「定着」という視点で描こうとするのは、相互性が欠如した家族システムの生成と凝固とをめぐる葛藤である。

このような家族や施設はそれぞれが孤立して存在しているのではない。家族・地域・学校・企業・行政・教育産業などさまざまな社会システムは、複雑に相補的に絡み合って、巨大な「養育と教育のためのシステム連関」を構築しているのである。このような巨大な「養育と教育のためのシステム連関」を、田中氏は「学校複合体」と呼んでいる(2)。この二つの事例によって、この「学校複合体という巨大システムとそのうちに下位システムとして組み込まれている家族や施設などの存在様態が、くっきりと浮き彫りになる」というのだ。

そのとき、威力を発揮するのが「システム化」と「相互性」という二つの概念である。この二つの概念を田中氏にしたがって定義するなら次のようになる。「システム化」というのは、合理的計画的職務遂行のための自他の物象化であり、全成員をシステムの機能要件として道具的に配置する効率的な組織化方法、すなわち人為的な集団の組織の仕方のことである。それにたいして「相互性」とは、発生において母子関係に由来し、自然性をもち、歴史においては前近代的性格をもち、日常の状況のなかでたんに事実としてだけではなく規範として働く人間の関係の在り方を指している。

それでは、ホスピタリズムは、このシステム化と相互性とによってどのように説明されることになるのか。田中氏は次のように述べている。

「どんな場合にも不可避的に発生する制度化の不徹底や不備がホスピタリズムを生み出し、それが［相互性を樹立するか、一層整備されたシステムを構築するか］という択一を課題づける。新たな制度化は、いずれ新たな制度化を進める契機であるホスピタリズムを生み出す。こうして、ホスピタリズムと教育の制度化は限りなく循環するのである。」(3)

システム化（制度化）によってもたらされるホスピタリズムの生起、ホスピタリズムから引き起こされる新たな相互性樹立への試行、その相互性をも組み込んだ新たなシステム化、そのシステム化による新たなホスピタリズムの生起、そしてまた相互性樹立への努力……こうして循環（悪循環というべきだろう）を繰り返しながらホスピタリズムを契機としてシステム化は進展していくのだ。Mの漂流はこのような学校複合体のシステム化と相互性の循環を明らかにしている。この循環から目をそらしてはいけないのだ。

この二つの事例を読むことによって、読者はおそらく驚きと苛立ちを感じながら、今日の学校複合体とは何であるかという問いの必要性と妥当性とを納得することだろう。さらに、「システム化」と「相互性」という二つの相補的な概念が、このような事例を解き明かす解釈の枠組みとして妥当性をもっていることを確信するだろう。

田中毎実氏は、学校複合体の下位システムとして家族と施設を選択することによって、従来の教育学研究においてはほとんど問題にされてはこなかったホスピタリズムと児童虐待という事象を、初めて主題的に教育学研究として位置づけたということができる。それというのも、ホスピタリズムと児童虐待はどちらも心理学の主題として考えられてきたからである。心理学の主題ということは、これらの問題の中心が心の病理であり、その発生の原因は心に由来し、解決の方法も心のケアに終わるということを意味している(4)。田中氏は、それにたいして両方の事例が、学校複合体におけるシステム化と相互性の問題であると捉えることによって、ホスピタリズムと児童虐待の問題の構成の次元を、心の問題からシステム化と相互性の均衡を図る問題へと変更しようとする。この試みは、田中論文と共著論文を読まれたら納得できるように、説得力をもった形で成功しているといえる。

二つの事例をとおして、学校複合体の外部に位置するような、子どもの教育や養育の問題などは存在しないということが明らかにされているといってよいだろう。施設はいうまでもなく、家庭ももはやそれ自体閉じられた集団であることはできず、好むと好まざるにかかわらず、学校複合体の一翼を担うように位置づけられているのである。それを個別に見ていたのでは真実をとらえることはできない。

したがって、田中氏にしたがえば、子どもをめぐる問題の解決は、人為的な集団の組織の仕方としての「システム化」と、発生において母子関係に由来し日常の状況のなかで単に事実としてだけではなく規範として働く「相互性」との間に、適切な均衡を見出だすこと以外にはない。具体的には、虐待の問題に関して田中氏が述べた「被虐待児を専門にあつかうことのできるような組織と連携が、たとえ相互性と背反するシステム的制度化のみをより一層進める結果に終わるにしても、まずは第一歩として、実質的に作り出されるべきである。」といったことを認めるほかはない。

これらは、理論的な説得力をもって私たちに同意することを迫ってくる。田中氏がここで展開してみせてくれた学校複合体全体を説明することへの圧倒的な力業の前では、それ以外の思考を見いだすことすら不可能に思えてくる。田中氏の理論は、一方でシステム化（制度化）を近代の病として全面的に拒否し、相互性へ回帰することによって教育を再生しようと

考える素朴で空想的な教育理想主義者を撃つ。他方で、田中氏の理論は、日々の実践のなかで、強力なシステム化の圧迫を受けつつ、問題に真摯に対応することによって、相互性を生みだしてシステム化との均衡を図る教師・施設職員・社会福祉関係者の営みが無意味ではなく、そのような実践のなかにしか人間の未来の可能性がないことを明らかにすることによって、彼らの日々の努力を支援する。

田中氏がこれらの論文において、教育学研究に新たな領野を切り拓いたことは間違いない。しかしながら、そのことを高く評価しつつも、いくつかの疑問点が残ることも事実である。教育人間学の立場から残された問題点を整理し、さらなる問題解明に向かっての提案をいくつかしたいと思う。

3．事例の選択と記述という問題

ここで取りあげられた事例は、二つとも学校複合体の一部をなすとはいえ学校の外部の家族と施設の問題である。もちろん厳密に言えば、どちらの事例にも学校は関与している。しかしながら、そのなかで教師がはたしている役割はそれほど大きくはない。Mの例では施設が主要な子どもの問題の場所であり、A男B男の例では家庭が主要な子どもの問題の場所である。したがって、前者ではMと施設職員との関係に焦点が当てられ、そして、後者ではA男B男と家族、家族と係わる施設関係者との関係に焦点が当てられることになる。どちらにおいても教師や学校はほとんど取り扱われてはいない。この事例の選択は、学校複合体を明らかにしようとする田中氏の立論に問題を残してはいないだろうか。

そして、もう一つ別の問題がある。田中氏の理論がよっているのは、鷹尾雅弘氏によってなされたMやA男B男の記述である。鷹尾氏はカウンセラーとして彼らと直接に向かい合い、そこから彼らの存在様態を浮かびあがらせる詳細な記述を提示している。そのさい利用されている資料は、鷹尾氏自身の記録、さまざまな心理検査の結果、箱庭療法の記録、作文、児童精神科医の所見、施設職員の記録、警察の通告、等々から成っている。できうる限り包括的に資料を提示しようとする試みがなされているが、しかし、箱庭や作文を除くと、子ども自身が表現した子どもの側の生きた世界の在り様を表す資料が乏しいように思われる。

もちろん暴力や抵抗といった、状況にたいする子どものさまざまな投企自体が、子どもの生きた世界の在り様を示しているのだが、それらの投企は、子ども理解の資料としては、一面的なものにとどまりはしないだろうか。この記述の偏りと資料の偏りとが、田中氏の中核的概念の一つである「相互性」の理解を限定してしまってはいないだろうか。

さらに、この事例の選択の問題と記述と資料をめぐる問題とが、田中氏の「システム化と相互性」という理論の枠を限定していることが予想されるのだが、そのことは後に述べることにしょう。ここでは、順にこの二つの問題について詳しく述べることにする。まず、学校の病理の事例について考えてみよう。

学校複合体の下位システムとしての家族と施設をめぐる問題圏は、先に述べたように、これまでの教育学研究においてほとんど手つかずの領域であり、田中氏の研究は、その問題の位置づけの仕方においてもすぐれていることはすでに述べたとおりである。しかし、選択された二つの事例の戦略的重要性を肯首しても、学校複合体の巨大システムに位置する家族や施設の存在様態を明らかにするには、家族や施設だけではなく、学校そのものの問題を主題として取りあげる必要があるのではないだろうか。学校の問題を直接に取りあげたなら、学校複合体はホスピタリズムと児童虐待をとおして描かれた様相と共通点をもちながらも、また別の様相を示すのではないだろうか。そのことが翻って、学校の存在様態とは異なる家族や施設の存在様態の特殊な相の性格を示すことになるのではないだろうか。

それでは、学校の問題としてどのような事象を取りあげればよいのだろうか。私の考えでは、「登校拒否」と「いじめ」を取りあげるのがよいと思われる。

これらを選択する理由の一つは、この二つの問題がこの数年のもっともホットな「教育問題」であるというところにあるのだが、本当の理由は次にある。登校拒否はさまざまな幅をもちつつも、学校という施設が産出している施設問題である。学校から学校以外の教育施設（フリースクールなどに限らず家庭を含む）へと子どもは漂流していく。これは田中氏の枠組みで言えば、「漂流」の問題にあたるのではないかと考えられる。それにたいして、いじめは家族の境界維持をめぐる暴力としての児童虐待と同様、学級という境界維持をめぐる暴力と係わっており、田中氏の枠組みで言えば「定着」にあたると考えられる。つまり「漂流」－「定着」とは、家庭や施設においては「ホスピタリズム」－「児童虐待」にあたり、学校においては「登校拒否」－「いじめ」にあたると考えられる。したがって、それぞれは形式的に同じ構造をもった問題の一対として考えることができる。このことを図式化すると次のようになる。

	漂　　流	定　　着
家　庭・施　設	ホスピタリズム	児童虐待
学　　校	登校拒否	い じ め

このように問題を設定し直したとき、学校の問題事例を新たに考察することによって、学校複合体の現在をこれまで以上により立体的に描出することが可能となるだろう。教育問題を語る「戦略的高地」の位置は、より明確になるのではないだろうか。

ところで、登校拒否といじめ、この二つの事象を選択することの意義は、これにとどまりはしない。それは先にあげた二番目の問題、事例の記述の問題と関係してくる。それというのも、ホスピタリズムと児童虐待の事例が提示されている記述には、子どもによって表現された資料がほとんどなく、記述は心理学者や職員の観察に規定されている。そのため、子どもの側からの主体的な応答の痕跡を見えにくくしている。

もちろん、田中氏は人間学的前提として「人間が常に自分自身の形而上学的な存在意義を求めて投企する情熱的、活動的存在であるということ」ととらえ、そこから、不適応行動は「自分の存在意義を確認しようとする全存在的な意味模索」の行動であるとし、彼らの暴力や抵抗あるいは迎合をも、世界への子どもの必死の投企として理解しようとしている。しかし、子どもらの表現できる幅があまりにも限定されている。その結果、子どもらの内的世界自身の狭さと対応するように、田中氏の子どもの内的世界の解釈の枠も狭いものに限定されているように思われる。

登校拒否やいじめの事例を取りあげたときにはどうであろうか。学校の事例を取りあげるとき、事例の記述の水準は、子ども自身が表現した日記や手記を取り入れることによってさらに広がることになるだろう(5)。そうしたとき、たとえば、社会学者桐田克利氏が『苦悩の社会学』で、苦悩の果てに自死した少女たちの日記や手記から読み取ったように、子どもの側から講じられる世界にたいするさまざまな呼びかけや働きかけが見えてくるに違いない(6)。そのとき、子どもがどれほど意味生成の可能性に向けて自己投企しているかがわかるだろう。陰影に富んだコミュニケーション世界のなかで、ユーモアによってダブル・バインド状況をきわどくかわしたり、かわしきれずにそれに捕らえられ苦悩を感じたり、それでもなお出口を求めて新たな投企を試みる子どもの姿が見えてくるはずである。

鈴木晶子氏は田中氏の論文へのコメントのなかで、より巧妙に潜在化してダブル・バインド状況を促進するシステム化に対抗するためには、「コントロールされているかに見える人間が、それぞれのうちに隠し持っている知恵や戦術」「トリックスターというべき態度」が不可欠だということを述べている(7)。このようなパラドックスを乗り超える戦術は、具体的にはメタファーや笑いやユーモアを指すが、このようなコミュニケーションの力を子どものうちに見いだすのは、〈遊び〉においてである。しかし、ＭとＡ男Ｂ男の事例では、彼ら

の全存在的投企のなかに〈遊び〉という子どもの側の力を読み取るのは困難である。それというのも、この子どもたちがそのような力の発現をできなくなっていること自体が問題なのである。

たとえば、Mに箱庭療法を試みたときにできあがった作品は、「箱の中一杯に動物や人形がぎっしりと詰め込まれ、しかもすべてがきちんと向こうから手前へと向けられ、そのうえ動物の列、人形の列などと厳格に仕分けられている」という。文字どおり、ここには、ボールベアリングでいえばベアリングが十全に機能するための「遊び」にあたるものが欠けている。それと同時に、躍動する生命のパターンとしての〈遊び〉の世界が、ホスピタリズムの事例にあげられたMの場合も、そして児童虐待の事例のなかの子どもたちにも欠けていることがわかる。

それにたいして、いじめや登校拒否の問題を抱える子どもには、多くの場合失敗に終わるとはいっても、これらのダブル・バインド状況を乗り超えようとするコミュニケーションの様式を見いだすことができる。そして、このように子どもに〈遊び〉を見ることのできる事例を知ることは、翻って、ホスピタリズムや児童虐待に曝されている子どもの投企の解釈を、これまでとは異なったものへと変更させる可能性をもつ。あるいは、それぞれの事例を比較することによって、それぞれの病理のもつ特徴をより深く理解することができるようになるかもしれないのだ。

4．教育人間学からの応答

高度資本主義の社会においては、これまでの生産に変わり消費が、そしてものにたいして情報とサービスが重要になると言われている。これまで商品とならなかった人間のサービスも、役割行動のセットとしてパッケージ化され、商品として売られていく。このように考えると、システム化と相互性の相剋は、教育のみならず人間生活の全領域において進行しており、それまで人間の聖なる奉仕として理解されてきた領域が、システム化によって侵食されているのである。したがって、その侵食されている領域の最前線に位置する人々、教師、カウンセラー、看護婦、福祉関係者は、すべてみな同型の課題に曝されているといってよい。このように考えてみるとき、田中氏がここで問題にした理論図式の射程はたいへん広くて、カウンセリングや福祉や医療、看護といった他の領域の問題圏をも包摂しているといえよう。

田中氏のシステム化と相互性の理論は、〈ホスピタリズム〉〈教育の理論〉〈教育の制度化〉の相互に連動した学校複合体の動態を、マクロとミクロのレベルで連関づけて解釈すること

を可能にする骨格の太い解釈枠組みである。そして、実践的な場において責任ある大人のぎりぎりの応答として、「システム化と相互性との均衡」を探ることという田中氏の選択は、状況を共にするものとして私には否定することはできない。

このことを認めながらも、「システム化と相互性との均衡」を探るという課題は、教育人間学からみたとき、理論課題の設定としては、十分ではないように思われる。

田中氏のいう相互性は、イメージとしては豊かな生の可能性を垣間見せることがありながら、概念規定されたときにはイメージの豊かさと比較して幾分痩せているのではないだろうか。なぜ相互性の幅が広がったり縮小して見えるかの理由は、すでに述べたように、選択した事例に見合った幅で相互性の概念が構成されているからである。異なった事例を取りあげるとき、相互性概念はさらに広さと深さとを獲得することになるだろう。しかし、それでもなお十分ではないのだ。

田中氏は相互性を支えるのは「自明性」であるという。ここでいう自明性とは、ボルノウの気分としての「被包感」に彩られ、エリクソンの「基本的信頼感」によって支えられる「人間存在のもっとも基本的な存在様態」とみなされている(8)。しかし、この自明性のとらえ方は、私にはスタティックなものに思える。自明性は「生成」そのものでないだろうか。そうするとやはり、生成とは何かという生成の理論へと向かわざるをえないのではないだろうか。そして、相互性が〈生成の相〉において理解されるとき、相互性はシステム化と二項対立的に設定されたレベルの意味よりもさらに深い事象であることが理解できるだろう。そのとき、システム化と相互性とは立体的な構造をもったものとして捉えられことになり、田中氏のいうシステム化か相互性かあるいはその均衡かといった議論自体が問いなおされることになるに違いない。つまり、この事例を前にして問われるべき理論的な課題とは、コミュニケーション論的人間学で言いなおすならば、〈意味生成〉の理論的な究明である。

子どもは意味生成によって自明性を獲得するのであって、自明性に基づいて意味生成をするのではない。また、子どもの側に生成を促すさまざまな機構が働いており、その機構の力がかえって大人の側の成熟を発現させるのである。それは、よるべなきものとしての子どもへの応答としての大人の責任性の発見という田中氏の理論とは、微妙に異なっている。この差異は、子どもと大人との出会いにおいて、もっとも意味が生成する瞬間をモデルにして「意味生成の大人－子どもの教育人間学」を構想してきた筆者と(9)、子どもの問題に直面して相互性を創出しようとする大人の日々の成熟に力点を置いて、異世代の相互形成としての人間形成論を構築してきた田中氏との差異である。しかし、私たちはたいへん異なった場所

から出発しながら、すぐそばまで近づいているように思える。

✣註

（1）　田中毎実「ホスピタリズムと教育における近代――人間形成論的再検討」教育思想史研究会『近代教育フォーラム』第2号、1993年。ならびに田中毎実・鷹尾雅裕「制度化と相互性――ホスピタリズムとその一事例に関する人間形成論的研究」愛媛大学教育学部教育学科編『教育学論集』第13号、1991年。「虐待と家族」は未刊行。

（2）　田中毎実「ホスピタリズムと教育における近代――人間形成論的再検討」教育思想史研究会『近代教育フォーラム』第2号、1993年、55頁。

（3）　同上書、56頁。

（4）　ちなみに、以前は児童虐待は心の問題ではなく経済問題としてとらえられていた。つまり家庭の貧困が児童虐待の主要な原因としてとらえられていた。したがって、そこでの解決法は、経済的救済によるしかない。児童虐待が心の問題としてとらえられることは、現在もあるであろう児童虐待における経済問題を隠蔽する可能性をもっている。そのことについては、上野加代子「児童虐待の社会的構築――言説にみる問題の帰属」『ソシオロジ』39巻2号、1994年。

（5）　たとえば、石川憲彦・内田良子・山下英三郎編『子どもたちが語る登校拒否』世織書房、1993年。

（6）　桐田克利『苦悩の社会学』世界思想社、1993年。

（7）　鈴木晶子「教育学の新しい転回：治療学的教育学の可能性――田中毎実氏の論文を手がかりに21世紀の教育学を展望する」教育思想史研究会『近代教育フォーラム』第2号、1993年、97頁。

（8）　田中毎実、前掲書、62頁。

（9）　矢野智司『ソクラテスのダブル・バインド――意味生成の教育人間学』世織書房、1995年。

（本論文はもともと1995年に田中毎実氏の要請のもとに執筆されたものである。田中論文と田中・鷹尾の共著論、ならびに田中論文について教育思想史研究会の紀要『近代教育フォーラム』（第2号、1993年）に掲載された市村尚久氏・蔦野克己氏・鈴木晶子氏らによるコメント論文、そして本論文の「システム化と相互性の教育人間学的理解」とほかに5名ほどの臨床教育学や精神科医や臨床心理学の研究者らによるコメント論文、さらにこれらのコメント論文への田中氏からの再コメント論文［リプライというべきか］という、幾重にも声が反響し合ったユニークなスタイルの研究書となるはずだった。しかしながら、出版には至らなかったため、拙論は発表の機会を失ってしまった。

この間、田中氏の仕事は新たな展開をしているが、このとき依然としてこの「システム化と相互性」は氏の研究の基本的な図式となっている。また、ここで言及している田中論文と田中・鷹尾の共著論文は、

臨床教育学にとっても問題提起を孕んだ重要な論文でありつづけている。そのため、田中氏の研究理解の一助となることを願って、ここに掲載してもらうことにした。
もともと本論文は、田中論文と共著論文とが同じテクストに載せられることを前提にして論述されていた。そのため、当初に書いた論文では、事例などについてほとんど言及していなかったが、このたびの拙著の掲載にあたり、省略されていたMならびにA男B男についての記述をするとともに、補足的に文章をいくつか追加した。しかし、全体の論旨には大きな変化はない。田中論文ならびに田中・鷹尾の共著論文が、広く読まれることを願っている。）

（やのさとじ　京都大学大学院教育学研究科）